

研究

貧窮問答歌と中国文学

古 沢 未知男

言ふまでもなく貧窮問答歌は其の標題を別にして一篇すべて和文から成つて居る。従つてそこには、表面一片の所謂漢文的要素は認められない。これが例へば梅花歌序や淡等謹状や遊於松浦河等になると、私も嘗て聊か論ずる所もあつたが、^{〔注1〕}此等はその文詞文面よりして、直ちに其の示唆

影響源として中国文学作品の存在を思はせるものがある。或はよしそれがそのまま漢文の形でなくとも、例へば讚酒歌の如き、一見直ちに漢籍漢文学作品の翻訳乃至引用とわかるやうなものならともかく、此の作品に至つては、当初よりさういふ関聯を想起せしめるやうなもの恐らく先づないと言つて良いであらう。即ちこゝに何かの漢籍漢文学作品を本歌の示唆影響源として認めんとする場合、其の可否について大いに論の岐れる所以が存する。勿論比較研究上の作品解釈の基本限度の相違といふ問題はあるにしても本歌が前に挙げた諸作品と此の点著しく趣舎を異にして居る事だけは容易に認められる。而も私の見る所、さういふ性質の此の作品ではあるが、それがよく仔細に検討すると、思ひ掛けない所意外に多く中国文学作品に示唆影響源の存

する事を知るのである。貧窮問答歌も、さういふ直接間接の示唆影響源、つまり原抛源流の問題については、今日まで先学既に可成り多くの論がなされて居る。がそれでも尚まだ幾多疑問の余地の残されて居る事も否定出来ない。

例へば吉川幸次郎氏は、本歌と陶淵明詩との關係については根本的にこれを否定し、又「甑には蜘蛛の巣かきて」の詞句表現を以て、中国にない日本人独特の発想であると言はれる。(比較文学第三卷「中国文学の日本における受け入れられ方」)^{〔注2〕}が果してさうであらうか。以下右吉川氏の説を中心に、主として一、詞句・表現、二、内容・性格の上から少しく私見を加へて見たいと思ふ。

一、詞句・表現

先づ詞句用語の上で本歌に關係ありはしないかとして従来指摘せられて居るもの――勿論これはあくまで類似類想の詞句たるに止まり、前にも述べた本歌の特殊性質上、一字一句それが直ちに本歌の典拠といへるかどうかは多分に

問題であるが——に大凡次のやうなものがある。^{〔注3〕}

〔堅塩を取りつづしろひ、糟湯酒うち噉ろひて・吾をおきて人はあらじと、誇ろへど寒くしあれば、麻衾引きかかふり、布肩衣ありのことごと、着添へども寒き夜すらを、吾よりも貧しき人の、父母は飢多寒ゆらむ、妻子どもは乞ひて泣くらむ、・・・綿もなき布肩衣の、海松の如わわけ下れる、かがふのみ肩に打懸け、伏廬の曲廬の中に、直土に藁解き敷きて、父母は枕の方に、妻子どもは足の方に、囲み居て憂ひ吟ひ、竈には火気吹き立てず、甑には蜘蛛の巣かきて、飯炊ぐことも忘れて、・・・かくばかり術なきものか、世の中の道〕「飢寒飽所憂」〔被褐守長夜〕
「弊廬交悲風」〔飲酒二十首、其十六〕「豈不寒与飢」
「已矣何所悲」〔詠貧士七首、其一〕「凄厲歲云暮、擁褐曝前軒」〔傾壺絕余瀝、闔竈不見煙〕〔全其二〕「弊襟不掩肘、藜羹常乏斟」〔全其三〕「芻蕘有常温、採菘足朝飧、所懼非飢寒」〔全其五〕「年飢感仁妻、泣涕向我流」〔丈夫雖有志、固為兒女憂〕〔全其七〕
〔風雜り雨降る夜の、雪雜り雪降る夜は、術もなく寒くしあれば〕

「風雨縱横至、収斂不盈塵、夏日長抱飢、寒夜無被眠」
〔怨詩楚調示龐主簿鄧治中〕

〔吾をおきて人はあらじと誇らへど〕

「如欲平治天下、当今之世、舍我其誰也、」〔孟子公孫

丑下）

〔天地は広しといへど、吾が為は狭くやなりぬる、日月は明しといへど、吾が為は照りや給はぬ〕

「謂天蓋高、不敢不局、謂地蓋厚、不敢不跼」〔詩經小雅正月〕「日居月諸照臨下土」〔全邶風日月〕

「恢々六合間、四海一何寬、天網布絃網、投足不獲安」

〔文選歐陽建石臨終詩〕「宇宙雖広無陰以憩」〔全志休

璉与広川長岑文瑜書〕「仰視白日光、瞰々高且懸、燭八絃

内、物類無頗偏、我独抱深感不得与比焉」〔全劉公幹贈

徐幹詩〕

〔甑には蜘蛛の巣かきて〕「甑中生塵范史雲」〔後漢書独行范冉伝〕

「世の中を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ鳥にし

あらねば」〔静言思之、不能奮飛〕〔詩經邶風柏舟〕「

願飛安得翼、欲濟河無梁」〔文選魏文帝雜詩〕

さて第一の陶詩否定であるが、実はこれは西郷信綱氏が

其著「万葉私記」〔第二部「人麿から家持まで」〕の中で

本歌を取り上げ、素材・発想・リズム・語彙の各方面から

説き

貧窮問答歌の下敷きになっているのが陶淵明の「貧士を

詠ず」等の作であることはほぼ確かである。〔全書一八

二頁）

と言ひ、或は又「飢寒」「弊廬」「褐」〔布肩衣〕「檻襪

」等の語彙を挙げ

これだけ見ても陶詩が憶良の種本である事は殆ど疑う余地がない。……たとえば陶淵明の抱いていたような「貧士」という觀念に憶良も感染しており、又陶淵明に
ならぬ日本の貧士として彼は貧窮問答歌を作った云々。

(全書一八〇頁)

とも述べて居られるのに対して疑問を呈せられたものであります。

氏は陶詩否定の理由として1、作品感情の性質・方向が異なる事、2、陶淵明集が果して憶良に読まれたか否か伝本・伝来の問題、3憶良の時代果して淵明や陶詩がそれ程評価されて居たかどうか。中国に於ける淵明や陶詩作品に対する価値認識の問題の三つの点を挙げて居られる。

第一の点は次項更めて論ずるので、茲では便宜先づ第二・第三の点について考へるに、これは結局一口に言つて陶詩の影響を否定する理由にはならない。何故なら

1、陶潜集の記載ある日本国見在書目録が憶良よりずっと後代の事は確かだ、従つてなる程それはその限りに於て果して憶良が陶詩を読んだかどうかを立証するものとはならない。けれどもそれかと言つて、逆に憶良が陶詩を読まなかつたといふ証拠にもならない。勿論少くも時代からすれば、憶良がこれを読んだとしても一向差支へはな
い筈である。たゞ遺憾ながら事實は今日これを裏付ける

確証がないだけの事である。

2、次の淵明に対する価値認識の問題も全く同様である。吉川氏は中国で淵明の作品が高く評価されるやうになつたのは宋代蘇軾あたりの頃からで、憶良が中国に行つたのはそれより四百年ばかり前であり、淵明の文学的地位が余りまだ認められて居なかつた時代であつたとして、

「もしも憶良が影響を受けるほど熟読していたならば、中国人より先に陶淵明の価値を認めた事になる。しかしそれは考えにくい。(前掲書五頁)

と言はれる。がしかしこれもあくまで相対的の事であつて、憶良時代、つまり初唐時代淵明が全く無視されたり認められて居なかつたりした訳では毛頭ない。現に文選にも八首の詩があり、詩品の評にも既に淵明は取り上げられて居るし、所謂靖節を以て其の人物も広く知られて居た事は否定出来ない事實である。それに「もしも憶良が影響を受ける程熟読していたならば云々」と言はれる所に問題がある。けだし引用や示唆影響は、後にも述べるやうに必ずしもそれ程熟読を要しないし、況やそれが直ちに淵明の価値を中国人より先に高く認めた事にもならないからである。それより私は本歌に見られる陶詩と類似類想の詞句が余りに多い事を重視したい。

右一言触れた如く陶詩は文選にも取められて居る。有名な「採菊東籬下、悠然見南山」の一首及び「詠貧士」第一首

の二首を含む雑詩四首、それに行旅二首、挽歌一首計八首がそれである。が「飲酒」の詩は全くなく、其の上「詠貧士」の詩も七首中其一の一首だけであり、当面本歌に関係ありと思はれる其二・其五・其七等は之亦全く一首も見事が出て来ない。これはかの芸文類聚の場合も同様であつて、芸文類聚には詠貧士は其一・其四の二首が取られて居り、本歌の其二・其五・其七はこゝでも見当らない。

つまり此の事は前に挙げた本歌にもし詠貧士や飲酒等一聯の陶詩が引用或は影響して居るとした場合、それは文選や芸文類聚等所謂類聚もの抄出ものからではなく、これらを網羅総集した陶潜集から直接なされたものである事を想定せしめるものである。而も前掲の如く本歌に見られる陶詩との類似類想の詞句は、これを単なる偶然の暗合と見るには余りにも多きに上るといふ事を見逃す訳には行かないやうである。

尚本歌以外憶良作品には、同じく陶詩との關係を思はしめるものが多数ある。例へば後記有名な「思子等歌」にはよく言はれる淵明の「責子」の影があると考へられ、日本挽歌前詩序文中にある「独飛生於半路」の詞句の如き、飲酒二十首の第四首「棲棲失群鳥、日暮猶独飛」に同句を見出す事も出来る。

或は憶良以外万葉他の作品、更には万葉以外にも懐風藻等、陶淵明詩文詞句の引用と思はれるものも幾つか見かけ

られる。

吉川氏は「中国の文学から来たと思われるもの」として詩経小雅正月と邶風柏舟の二つを挙げ、「憶良は五経は一所懸命読んだと思われる」と言はれる。勿論憶良の頃五経は既に伝はつて居たし、これは社会でも既に十分重んぜられて居たのであるから、憶良がこれを読んだに違ひはない。がしかしその憶良がこれを読んだ、或は一所懸命読んだといふ記録明証は何もない。たゞ詞句其他周囲の文獻的檢索から之を推定するに過ぎない。而もそれは殆ど間違ひない事と思はれる。此の点詩経にしる陶詩にしる聊かの變りはない筈である。況や其の価値認識の如何にしても、前述の如く本歌への影響を否定する何の根拠にもならないといふに於てをやである。吉川氏が引用確實として詩経を挙げられるなら、私は略右の理由によつて陶詩も亦当然挙げ得るべきであると思ふが如何であらうか。

第二に「甌にて蜘蛛の巣かきて」について、これは前掲の如く後漢書范冉伝の「甌中生塵范史雲」から来たと思はれる。たゞ字句面後漢書の「生塵」が本歌では「蜘蛛の巣かきて」となつて居る訳である。此の事に対し吉川氏は中国にも「釜中生塵」といふ発想はあるが、本歌の如く「蜘蛛の巣がかよつて居る」とは言はない。かういふ発想表現の變化は、中国にない思想なり感情を日本人が初めて言ひ得た、「日本文学の鋭さ」を示したもので、言はゞ「日本人

の秀才性」とも称すべきものであると言はれ、小島憲之氏も之に賛して「中国詩と異なる彼の本領」であるとも評して居られる。(万葉34号「出典問題をめぐる貧窮問答歌」)がしかしこれがそれ程特筆すべき事であらうか。

思ふに「甌中生塵」といひ、「甌には蜘蛛の巣かきて」といひ、何れも甌(炊器)を用ふる事なき貧窮の様を形容して言つたものであり、其の意味に於て「生塵」でも「蜘蛛の巣かきて」でも全く同一の内容性格を表はすものである。

尤もこれが若し淡等謹状のやうな場合になると、事情は可成り違つたものになつて来る。即ち淡等謹状は稽叔夜の「琴賦」を採つて出来て居り、高山に生じた桐が日光に浴し山川風波の間に長じ、終に良匠によつて琴とされたといふ其の趣旨構想は全く彼に倣つたものである。が其の終り「琴となつた」といふ所、琴賦は「制為雅琴」とあるのが、謹状は「制為小琴」と変へられて居る。此の「雅」と「小」との相違は、私見によれば本文第三者的立場と当事者の立場との相違の外、藤原房前に呈せられた此の謹状に、実は作者旅人の転任帰京の望みが託せられて居た事によると解するものである。若しさうだとすれば、此の改変は一面誠に当然であると共に、やはり作者の叙智所謂秀才性といふものが認められる。

或はこれは源氏物語の例であるが、例の須磨卷光源氏論居の様を叙して「石の階松の柱竹編める垣しわたして」と

あるのは、言ふまでもなく白氏文集「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」詩其一の「石階柱竹編墻」をそのまま取つたものである。たゞこゝでも「桂」が「松」と改められて居る。これは恐らく松が常用卑近のものである所から自然さうなつたのであらうか。何か意味がありさうでもあるが、甌もあれ何れにしてもやはり一種の獨創性・叙智性が働いて居る事は事実である。けれども本歌の場合「生塵」を「蜘蛛の巣かきて」とした詞句表現の相違によつて、直ちに其の性格内容にまで変動を来すものではないやうである。従つてこれが中国になく日本のみにある日本人にして初めて言ひ得なものでなければ、況やこれが特に日本文学の鋭さ、日本人の秀才性を示すものでも何でもないと思ふが如何であらうか。

同じやうな事は陶詩次の場合でも言へる。即ち「闕竈不見煙」(詠貧士其二)は本歌の「竈には火氣吹き立てず」に当るが、「不見煙」が「火氣吹き立てず」となつて居る。又「凄厲歲暮、擁褐曝前軒」(全上)は明らかに中国式の誇張した表現であるが、本歌の貧窮の状を叙して「麻衾引きかがふり、布肩衣ありのことごと、着添へども云々」や「綿もなき布肩衣の、海松の如わわけ下れる、かがふのみ肩に打懸け云々」等と言つたのに適合する。或は又「丈夫雖有志、固為兒女愛、惠孫一晤歎云々」(全其七)の如き、いかに本歌の「吾をおきて人はあらじと誇るへど・・・父母は

飢寒寒ゆらむ、妻子どもは乞ひて泣くらむ」や「父母は枕の方に、妻子どもは足の方に、囲み居て憂ひ吟ひ云々」等とそっくりである。此等は何れも字句面措辞用語の違ひこそあれ其の発想表現の基盤に於ては、兩者全く軌を一にするものである。

尚、いま一つ、前に挙げた憶良の思子等歌

瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばましてしのばゆ云々（八〇二）

は同じく陶詩「責子」の「通子垂九齡、但覓梨与栗」に示唆を受けて居ると思はれるが、こゝでも責子の「梨」が思子等歌では「瓜」となつて居る。而も「梨」が「瓜」となつても、其の内容性格には別段殆ど変りはないであらう。

こゝで本歌に於ける漢詩文詞句引用の特徴を見るに、これは1、先づ引用の形式として

イ、引用が文選・詩經・後漢書、それに例の陶詩等、幾つかの漢籍漢文学作品に亘つて複合継合はされて居る。

ロ、更に其の同一漢籍にあつても、其の同一漢籍中の異つた幾つかの作品が継合はされて出来て居る。「天地は広しといへど云々」に於ける詩經小雅正月と邶風日月の詩句、それに文選歐陽建石臨終詩・応休璉与広川長岑文瑜書・劉公幹贈徐幹詩等、此等が断片的に或は連續的に結合されて居る如きである。中でもこゝで特に強く感ぜられるのは、貧窮の様を具体的克明に叙述し

た本歌一首全篇が、直接間接多かれ少かれ、「詠貧士」其二・其七を始めとして他の五首を含む七首全部、更には一部「飲酒」をも合はせた陶詩全般との深い繋がりが認められる事である。

而してかゝる複合継合はせによる成文方式は、独り憶良此の作品だけに限らず、万葉全般に通ずる特色である。殊にそれが漢文による作品の場合此の傾向は特に顕著で、同じ憶良の沈痾自哀文や吉田宜書状等其の最も好適例である。そして本歌の場合、それが終始漢文ならぬ純然たる和歌和文である所に大いに注目を要するものがある。

2、次に修辭面に於て

イ、「天地は広しといへど、吾が為は狭くやなりぬる」と「日月は明しといへど、吾が為は照りや給はぬ」は明かに対句の形をなして居るが、「風雜り雨降る夜の、雨雜り雪降る夜は」は同時に同字の繰返しや易字が行はれて居る。恰も本歌中に引かれた詩經のそれを思はせるものがある。もつとも対句や易字等、必ずしも中国文学を待たなくとも、我国古来の文献既に同種のものが見られはするが、本歌の場合特にそれが全一首の中に此等幾つかの手法が綜合して用ひられて居る点、先に述べた詞句用語の面に併せ考へる時、或はやはり中国文学の示唆影響によるものではないかとの感を抱か

せる。

口、本歌末尾の「しもととる里長がこゑは、ねやどまで来たち呼ばひぬ、かくばかりすべなきものか、世の中の道」の歌ひ振りについて、小島氏は窮者の嘆きを次第に畳みかけながら絶頂まで歌ひ上げた手腕を称して居られる。(前掲「出典問題をめぐる貧窮問答歌」)それに誤りはない。但だ氏はこれを中国詩とは異なる歌境として居られる。がこれも必ずしも憶良乃至日本人独特のものではなく、私はやはり中国に其の例を見る事が出来ると思ふ。例へば彼の「漁父辞」にしても、内容・趣向の上には勿論若干の相違は存するが、例の「滄浪之水」の歌を最後に置いて、漁父の見解を最終的に表明して居るあたり、やはり本歌と軌を一にするものである。

二、内容・性格

吉川氏は本歌に陶詩の示唆影響なしとする陶詩否定の一理由として、本歌と詠貧士とは感情の性質方向が異るとされる。具体的には憶良は貧乏は悲しむべく歎くべきもの、人々が脱却を求めべきものといふ態度で歌って居るが、淵明の詠貧士はそれ程貧乏を厭ふべきものとしては歌って居ないと言はれる訳である。氏は其の例として

万族各有託、孤雲独無依。 暖暖空中滅、何時見余暉。

(詠貧士其一)

を挙げ

この歌い出しはちぎれ雲の自由を貧乏人のたよりなき、しかしそのゆえにもつ自由さにたとえて歌っている。これは憶良の歌の感情とは違っている。(前掲、比較文学第三卷「中国文学の日本における受け入れられ方」四頁)と説明される。

今本歌と此詩とを比較するに、先づ本歌は更めて言ふまでもないが、風雪の夜父母妻子と共に飢寒を凌ぐ術もなく憂ひさまよひ居るに、あらゆる事が租税取り立ての里長の声は寝屋戸までかん高く伝はって来る。と其の貧窮の状を叙して、同じく人として生れながら何故かく非情不公平な扱ひを受けなければならぬのかと、ひたすら天を怨み世を悲しみ憤って居る。

これに対し「詠貧士」其の一は

万族各有託、孤雲独無依。 暖暖空中滅、何時見余暉。 朝霞開宿霧、衆鳥相与飛。 遲遲出林翮、未夕復来帰。 量力守故轍、豈不寒与饑。 知音苟不存、已矣何所悲。

万物それぞれ相依り相託する所あるに、ひとり孤雲(貧士に譬へる)のみはそれが無い。衆鳥は朝に出でて夕にはまた来帰するが我一人途を異にす。貧士は分を知り節を守るが故に徒に出で仕へず、飢寒は固より免れない所である。ただ知音(知己)のみよく之を解するが、たとひ其の知音なくともまた悲しむに足りない。

といふのが一篇の趣旨である。

即ち本歌がいたく世を悲しみ憤つて居るのに対し、此詩はあくまで分を知り命を弁へ、決して怨み悲しまうとはして居ない。なる程吉川氏の言はれる通り、そこに存する感情の性質や方向は確かに異つて居ると言はなければならぬ。

但だこれは詠貧士七首中の其一で、同詩其四等と共に詞句的にも總体的にも本歌とはそれ程密接な関係のないものである。然らば本歌に最も関係ありと思はれる同詩其二・其七の方はどうなつて居るか。先づ其二を見るに、これは凄厲歳云暮、擁褐曝前軒。南圃無遺秀、枯条盈北園。傾壺絶余瀝、闕竈不見煙。詩書塞座外、日昃不遑研。間居非陳陋、竊有愠見言。何以慰吾懷、頼古多此賢。で、要旨

年暮れ冬の敵しきにも褐（夏衣）を着て日に当り漸く暖を取る。南圃北園共に荒涼たり、酒なく食なく、唯詩書は多く存するも研鑽の暇がない。我固より閑居、嘗て孔子が嘗めた陳蔡の厄とは到底比すべくもない。而も當時彼の子路が発した如く、我も亦憤りの言あり、何を以て其の懷を慰めんか、幸に前賢の聊か之を慰むるに足るものがある。

といふ事になる。

而してこゝで注意されるのは「竊有愠見言」の句のある

事である。「陳陋」「愠見言」は有名な

在陳糧絶、從者病莫能興。子路愠見曰、君子亦有窮乎。

子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣。（論語衛靈公）

を指す。而して「何以慰懷、頼古多此賢」と結局は此詩も、

此等前賢にならひ決して濫するやうな事はしないと、前詩其一と方向を同じくはする。が尚其間ひそかに「君子も亦窮する有るか」と憤りの言を発しないでは居られなかつたといふ、前詩にない新しい事実のある事を看過してはならない。そしてこれ本歌に歌はれた怨み憤りの情と相通ずるものである。

次に其七は

昔有黃子廉、彈冠佐名州。一朝辭吏婦、清貧略難儔。年

饑感仁妻、泣涕向我流。丈夫雖有志、固為兒女憂。惠孫

一晤歎、腆贈竟莫酬。誰云固窮難、逸哉此前修。

昔黃子廉は嘗て名州に佐となつたが、一度辭して歸るや清貧また比するものがなかつた。年饑多妻の貞節に感じては泣き、丈夫志有るも兒女惠孫のために憂へ、人の贈にも終に報ゆる所がない。固窮に処するは誠に難く、遠く此の前修（前賢）を慕ふのみである。

と、これ又前賢に学んで道を誤らないやう努力しようと言つては居る。が而も其の裏やはり固窮に処する事の至つて難く、つい憤り発せんとするの歎きを藏して居る。

かくて吉川氏の挙げられた詩其一は本歌とは余り関係な

く、本歌と関係ある其二・其七は何れも明らかに或は暗々裡に本歌に通ずる怨み悲しみの情が詠まれて居る。

尤も前にも一言した如く、本歌と詠貧士とを対比する時、勿論それは必ずしも本歌と詞句的に関係の有る無しのみを以て云々する訳には行かない。詞句関係の有無多少に拘らず、詠貧士七首全体に亘つて考へる事が必要である。けれど本歌の標題たり作歌の最大眼目たる「貧窮」「飢寒」の字は詠貧士にして幾つか拾ふ事が出来るし、且つ何よりも本歌の詳細具體的な貧窮飢寒の叙述は連作「詠貧士」七首全体を通して始めて総合的に描出されるからである。いま其の観点から一聊の詠貧士全七首を通観する時、淵明が果して心底から然く観じたか否か一部疑問は残るにしても、そこには又明らかに吉川氏の言はれる其一詩と同じ感情の性質方向のある事は否定出来ない。それは現に此詩其五には「豈不実辛苦、所懼非飢寒」なる詞の存する事によつても間違ひない。それではやはり吉川氏の言はれる如く、本歌と詠貧士とでは感情の性質方向が違ふ、従つて本歌に此詩の示唆影響は認め難いといふ事になるだらうか。決してさうはならないと私は言ひたい。

何となれば引用や示唆影響は、何も必ずしも当初より完全な理解や一致を求める必要はない。其の経過や過程に於て相似のもの類似のもの、否場合によつては逆のもの反対のものがあつても一向構はないからである。

具体的に本歌と詠貧士との場合、前述の如く一は貧窮を悲しみ歎き、天を怨み世を憤り、他は分を量り命を知り、天を怨みず人を咎めず、力めて貧窮を超克しようとする。そこには感情の性質方向の上で明らかに、場合によっては根本的本質的ともいふべき差違の存するのを見る。

がしかし其の前過程に於て貧窮が存し、而も少くも第一次的には、其の貧窮の存せざらん事を願ふ氣持に於ては、明らかに又兩者共通したものの存する事も認めなければならぬ。たゞ其の帰趨「量力守故轍、豈不寒与飢。知音苟不存、已矣何所悲」(其一)、「何似慰吾懷、頼古多此賢」(其二)、「誰云固窮難、逸哉此前修」(其七)と、単に貧窮を悲しんだり怨んだりするのでなく、進んでこれを超克脱却しようとする所に自然大きな違ひが現はれて居る。憶良はつまり其の前時点を取つて自己の作品の一部として居る訳である。従つてそれは真に紙背に徹した観照でも理解でもない。あくまで単なる表面皮相の採取ではある。けれどもそれで十分事足りるし、示唆引用たるに結構變りはない。殊に憶良他の作品にしても、或は憶良以外の作者にしても、万葉其他上代文学のそれにはかゝる事例は随所に指摘出来る。寧ろそれが当時引用の原型であつたとも言へる程である。

例へば彼の梅花歌序と蘭亭集序とを比べて見ても略同様な事は言へるし、有名な卷五旅人の歌

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかり
けり(七九三)

にしても、世の中の無常を知ればそれで覚り諦めが出来る
かといふにさうではなく、事實は却て益々悲しみを加へる
といふのである。彼の淡等謹状や遊於松浦河―遊於松浦河
の憶良作等の説もあるが、私は旅人作と考へる。――其他
超現実的世界をも作つた旅人にして然りである。

これは又源氏の例ではあるが、一卷の骨子殆ど白氏文集
長恨歌の模倣踏襲たる桐壺巻に神仙説がなく、あくまで生
々しい現実の世界が描かれて居る事、或は同じく白楽天閑
居の詩たる「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」一聯の
作を数多く引用した須磨巻が、閑適所かそれとはまるで反
対に一卷悉くこれ感傷といふが如き、何れも此の傾向を如
実に物語つて居る。^{〔注6〕}

そしてこれは強ち万葉や源氏だけに限らず、広く日本文
学全般に通ずる現象であり特色である。何事にも超脱諦観
する事が出来ず、常に悲哀感傷を抜け切らないのが、古来
我が国人の一貫した国民性である。本稿憶良の貧窮問答歌
も、中国の「詠貧士」に対して、正しく其の一典型を示し
たものに外ならず、日華両国民性の相違からすれば、これ
は寧ろ極めて自然の事とも言へるのではあるまいか。とす
れば右吉川氏の見解は、其の点を閑却され聊か潔癖に過ぎ
た解釈態度と言ふべきではなからうか。

性格内容の面に於て、それより寧ろ私は本歌の有する儒
家的経世的態度に注目したい。それは「吾を除きて人はあら
じと誇るへど」の一節である。前掲本歌と関係の深い詠貧
士其七には「丈夫雖有志」とあり、孟子公孫丑下には「如
欲平治天下、当今之世舍我其誰也」ともある。「丈夫志有
り」とは其の大いに天下に為すあらんとするの志であり、
孟子の言又治国平天下の典型的儒家思想の表明である。

――尤も此の場合「吾を除きて人はあらじ」と孟子の「舍
我其誰也」とは、正確には若干意味内容を異にする。が「
吾を除きて人はあらじ」の中には、自然憶良が己を以て天
下有為の人物とし、国家救済の資格を認めた意が多分に含
まれて居る。やはり儒家のそれと共通の地盤に立つたもの
と言ふ事が出来る。――

憶良には本歌の外尚有名な病に沈みし時の歌
をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てず
して(巻六・九七八)

があり、或は又世の脱俗者流を誡めた「令反或情歌并序」
もある。何れも名譽を尊び現実を重視した儒家思想に通ず
るものである。

所で吉川氏は此の「吾を除きて人はあらじ」の句に対し
ても、前記「甌には蜘蛛の巣かきて」と共に、中国にない
日本人独自の発想、日本人の秀才性であると言はれる。果
してさうであらうか。

周知の如く世を治め民を救ひ道を正さんとするのは儒家思想の根本理念である。右孟子公孫丑の言は最もよくこれを代弁して居る。或は論語述而や史記孔子世家に見える、孔子が宋に行き、司馬桓魋に殺されようとした時

天生德於予、桓魋其如予何。

と言つた如き、また其の端的な現はれである。論語や孟子其外儒家の諸典籍を繙けば、それは容易に窺ひ知られるであらう。憶良が大宰師旅人に宛てた書状にも

方岳諸侯都督刺史、並依典法、巡行部下、察其風俗。

と言つて居るのは、取りも直さず彼が自らを以て其の儒家的経世家に当てはめた態度がはつきり現はれて居る。そして翻つて本歌一篇を通観する時、そこには経世済民を以て己が任と自負する作者が、現実の矛盾に深い憤りを発し、或は不満反撥した真情が寧ろ一種の漢文式誇張——「吾を除きて人はあらじと誇ろへど」を始め、全篇随所に見られる此の誇張的表現は、どうしても本歌の単に日本式でない中国的な要素を強く感ぜしめる。——を以て披瀝されて居るのを見る。正しく彼此符節を合した手法と言つて良い。

勿論此等がこゝにそのまま悉く当てはまるといふ訳ではない。が少くも吉川氏の言はれるやうに、これが日本人独自の発想や表現では決してなく、そこにはやはりさういふ儒家的なものの影響を認めなければならぬ。一方では論語を始め此等儒家の書も万葉には数多く引用されて居る。

殊に本歌作者憶良は、もと／＼漢籍漢文の知識教養深く、勿論前述の如く表面皮相を免れないが——自ら遣唐使に附して二年も彼地に渡つて居る。従つて彼が作品に幾多さういふ中国典籍作品の影響が見られる事は、吉川氏の言にも拘らず、やはり西郷氏の言はれる如く、愈々これを有力なものとするのである。

彼の陶淵明は詠貧士や飲酒でも知られる如く、そして又吉川氏も言はれる如く、世俗を超越し貧窮を意に介しない彼独自の境地を拓いた。が彼固より儒家の流れを承けて居る事言ふまでもない。前に挙げた詠貧士の中で「誰云固窮難、逸哉此前修」(其七)「問居非陳陋、竊有愠見言。何以慰吾懷、頼古多此賢」(其二)と詠じて身を先賢孔子に比し、静かに閑居を楽しんで居るのである。但だ孔子は「君子固窮、小人窮斯濫矣」(「君子固より窮するも愠らず濫せず」と言つたのに対し、淵明は「竊有愠見言」と其の憤りの現はれる事を告白して居る事に注目したい。但だ彼の場合あくまで其の怒りを抑へんとし、こゝに孔子等先賢にあやかつて、自ら悟りの道に入らんとして居るの風が察せられる。つまり孔子愠らず、淵明愠らんとして之を抑ふ、所が憶良にはこれが出来なかつた。彼は率直にその愠りをぶちまけ、以て世の不合理に反撥せんとしたのである。

之を要するに貧窮問答歌は、詞句的には先づ従来言はれて居る淵明の「詠貧士」七首一聯の詩を始めとして、詩経文

選以下各種の漢籍漢文学作品から総合的に示唆影響を受けて出来たものと思はれる。そして其の示唆影響乃至引用は、あくまで部分的断片的一面に止まり、必ずしも其の源泉たる中国文学作品を全面的完全に把握消化したるものではなく、言はゞ表面皮相な中途半端なものに終って居る例も尠くない。にも拘らずこれも亦立派な引転用であり、これあるがため直ちに其の示唆引用關係が否定されるものでは決してない。否寧ろかゝる傾向は強ち貧窮問答歌のみに限らず特に上代文学に於ては屢々見受けられる通例であると言つても差支へない事を強調して置きたい。

(附記) 本稿尚第三の項目として、本歌の虚構性について述べなければならぬが、紙幅の關係上これは別稿に譲る事とする。

〔注1〕拙著「漢詩文引用より見た万葉集の研究」第二章 作品比較参照。

〔注2〕この歌に対して西郷信綱氏はその著「万葉私記」に陶潜(淵明)の「貧士を詠ず七首」の影響があることは疑いないと云っている。しかしことがらはそう簡単ではない。この詩に歌われている感情の性質・方向は異なる。憶良は貧乏は悲しむべく歎くべきもの、人々が脱却を求めべきものという態度で歌っているが、陶淵明の「詠貧士」の詩はそれほど厭うべきものとしていない。

……次に憶良が陶淵明を読んだかどうか、西郷氏は憶良は中国へ行き中国文を読み漢文も上手に書いているし、又「日本国見在書目録」に陶淵明集が載っているという。しかし見在書目録は憶良の時代よりずっと後の書物である。……

淵明が大詩人として尊重されるようになったのは宋代の蘇軾(東坡)あたりになってからである。憶良が中国に行つたのはそれより四百年ばかり前であり、陶淵明の文学的地位があまりまだ認められていない時代であった。

もしも憶良が影響を受ける程熟読していたならば中国人より先に陶淵明の価値を認めたことになる。しかしそれは考えにくい。……

憶良の歌を読むとたしかに中国文学から来たと思うものまた一方中国にない思想なり感情を日本人が始めて言い得たと思うもの、いわば日本人の秀才性ともいふべきもの、それが別に指摘される箇所がある。……

「甌には蜘蛛の巣かきて」という表現は後漢書の范冉なる人の伝に見えた「甌中生塵范史雲」から来ていると思われるけれども私が先に日本人の秀才性といったもの、それを現していると思うのは、かく「釜中生塵」という発想は中国にあるが「蜘蛛の巣がかかっている」とはいわれない。この発想は中国にはないものである……これは小さなことであるが日本の文学の鋭さであると思う。更

に「吾を除きて人はあらじと誇ろへど」というのは中国の書物にこういう表現があるのを急には思い当らない。

(吉川幸次郎、「比較文学」第三卷「中国文学の日本における受け入れられ方」)

〔注3〕最近諸家の論に、前記の外、清水房雄氏「貧窮表現の一類型」アララギ49巻6号、杉本行夫氏「万葉集と中国韻文」万葉集大成7、比較文学篇、小島憲之氏「出典問題をめぐる貧窮問答歌」万葉三十四号等があり、土屋文明氏は更に「貧家賦」を挙げて居られる。(「貧窮問答歌と貧家賦」アララギ49巻2号)

〔注4〕史記孔子世家には此間の事情を説明して左の如く記されて居る。

孔子遷于蔡三歲吳伐陳。楚救陳、軍于城父。孔子在陳蔡之間、楚使人聘孔子。孔子將行拜礼。陳蔡大夫謀曰、孔子賢者、所刺譏皆中諸侯之疾。今者久留陳蔡之間、諸大夫所設行、皆非仲尼之意也。今楚大國也。來聘孔子、孔子用於楚、則陳蔡用事大夫危矣。於是乃相与發徒、困孔子於野不得行。絶糧、從者病莫能興。孔子講誦弦歌不衰。

〔注5〕参考のため詠貧士其三・四・五・六を挙げて置く。

榮叟老帶索、欣然方彈琴。原生納決履、清歌暢商音。重華去我久、貧士世相尋。敝襟不掩肘、藜羹常之斟。豈忘襲輕裘、苟得非所歛。賜也徒能弁、乃不見吾心。(其三)安貧守賤者、自古有黔婁。好爵吾不榮、厚饋吾不酬。一旦

壽命尽、敝服仍不周。豈不知其極、非道故無憂。從來將千載、未復見斯儔。朝与仁義生、夕死復何求。(其四)

袁安困積雪、邈然不可干。阮公見錢入、即日棄其官。芻蕘有常溫、採芣足朝食。豈不實辛苦、所懼非飢寒。貧富常交戰、道勝無戚顏。至德冠邦閭、清節映西閭。(其五)

仲蔚愛窮居、遶宅生薔蓬。翳然絶交游、賦詩頗能工。举世無知者、止有一劉龔。此士胡独然、寔由罕所同。介焉安其業、所樂非窮通。人事固以拙、聊得長相從。(其六)

〔注6〕拙著「漢詩文引用より見た源氏物語の研究」第二章様式技法、第三章性格構成参照

〔注7〕孔子去曹適宋、与弟子習礼大樹下。宋司馬桓魋欲殺孔子、拔其樹。孔子去。弟子曰、可以速矣。孔子曰、天生德於予、桓魋其如予何。(史記孔子世家)